

東寺 西寺跡

「東寺」と「西寺跡」「羅城門跡」周辺を歩く

平安京のメインストリートである朱雀大路の南端には、平安京の表玄関である羅城門があり、その脇には国家鎮護のための二大官寺である東寺と西寺がありました。

現在は弘法大師ゆかりの東寺がときに近い形で伽藍を伝え、国宝の五重塔を京のシンボルとして世界文化遺産に登録され、偉容を誇っています。また、梅小路公園周辺は平清盛の西八条第のあった地域で、六孫王神社には清和源氏の発祥の地として源経基（つねもと）と伝える墳墓もあります。

このガイドマップでは、清盛ゆかりの若一神社を起点に、梅小路公園まで遺跡や発掘調査地をたどり、付近の見所をご案内します。



東寺 南大門

浄蔵貴所の塚 (鎌達稲荷神社)
平安時代中期の法力の僧。幼少から非常に聡明で学問や声明・文学にも秀でて、いわば平安時代のスーパーマンのような存在であったそうです。例えば堀川一条にかかる橋を、父親の棺が渡るうとした時、浄蔵が法力で蘇生させたことから、その橋の名を「一条戻り橋」と呼ぶようになったとか、法親寺の「八坂の塔」の傾きを法力で直したりとか、様々な逸話が伝わっています。また、祇園祭の山伏山の御神体は、浄蔵が修験者として大峯山に入山の姿を表したものとされています。



旧二条駅舎 (市指定有形文化財)



梅小路蒸気機関車館
梅小路公園内にある、旧二条駅舎をエントランスにした蒸気機関車の博物館。梅小路機関車庫は重要文化財に指定されています。(要入館料)

鴻臚館跡
平安時代前期、朱雀大路をはさんで東西に設けられた、外国使節(主に渤海国)を接遇するための迎賓館。



六孫王神社
清和源氏の祖といわれる六孫王源経基の邸宅跡に、その子満仲が社殿を建立。本殿背後には、経基の遺骸を納めたとされる神廟があります。



西八条第跡 (梅小路公園内)
平安時代後期、この辺りには平清盛が造営した広大な一門の邸宅群があったとされています。1181年に清盛が亡くなると、その2日後に火災が発生し、その後再建された建物も、平家都落ちの際に自ら火をかけて焼失させたといわれています。

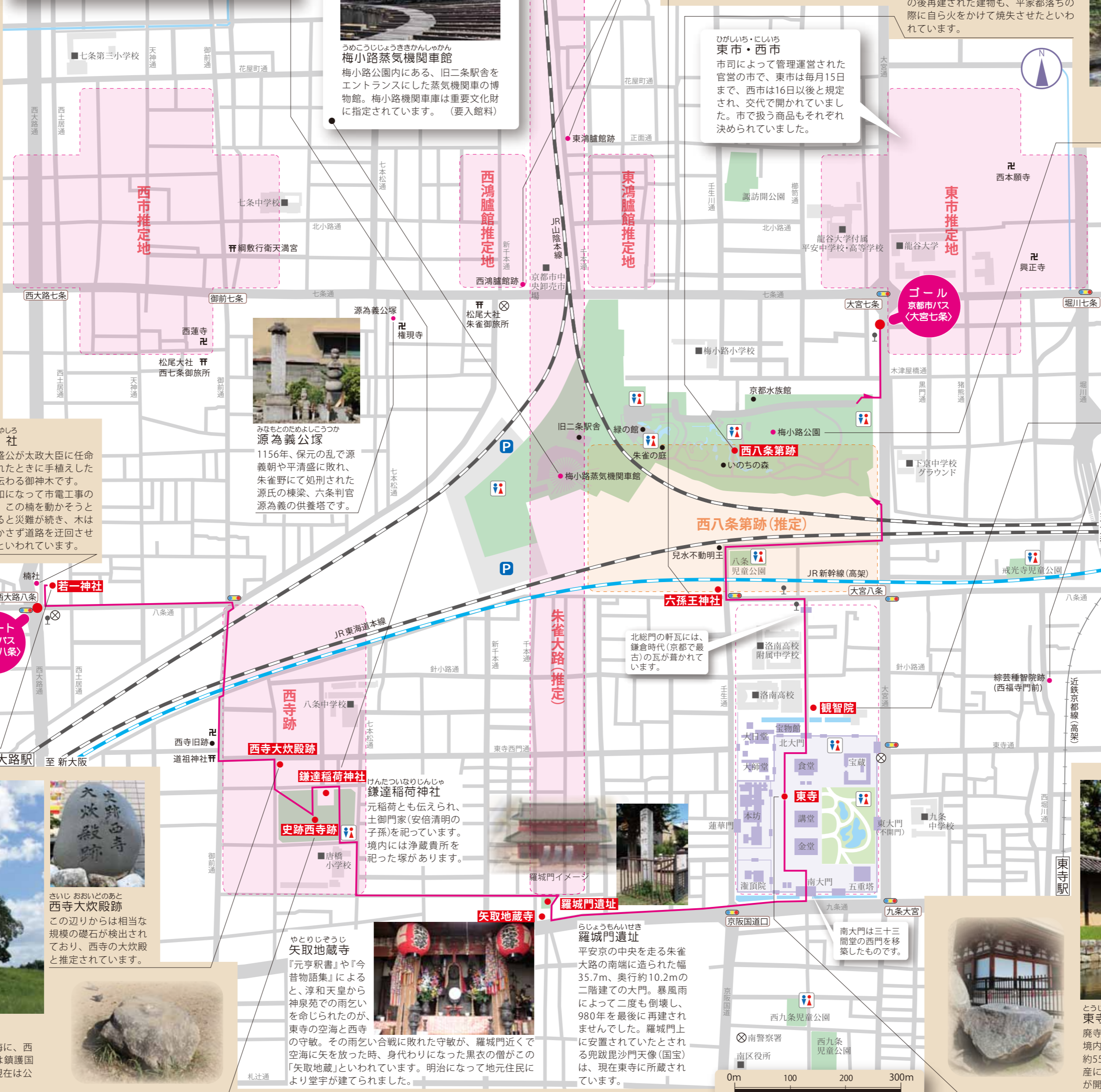


梅小路公園
広々とした「芝生広場」や「河原遊び場」など、市民憩いの場として親しまれている公園です。花や木々に囲まれた園内では、四季折々に移りゆく景色を楽しめます。



観智院
1308年、東寺に帰依した後宇多法皇の発願で造営された東寺第一の塔頭で、別格本山の寺院です。北政所の寄進により再建された客殿(国宝)は桃山時代の特徴を表し、床の間の「鷹の図」、襖絵の「竹林の図」は宮本武蔵の筆と伝えられています。

綜芸種智院跡
空海自作と伝わる「安産石薬師如来」がある西福寺前に建てられた石碑は、828年、空海が藤原三守(ただもり)の九条邸に創設した庶民の教育施設場所を示すものです。大学や国学に入れない身分の人たちに、種智(仏道真理を究めようとする心)を講義したと伝わります。(実際は九条弘道小学校付近にあったと考えられています)



楠社
清盛公が太政大臣に任命されたときに手植えしたと伝わる御神木です。昭和になって市電工事の際、この楠を動かそうとすると災難が続き、木は動かさず道路を迂回させたといわれています。



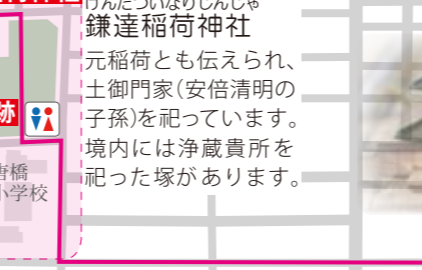
若一神社
平清盛の別邸であった西八条殿内に、紀州熊野の若一王子の御神体を祀ったことが始まりです。その後、清盛が太政大臣に任命されたことから、開運出世の神社として信仰されています。



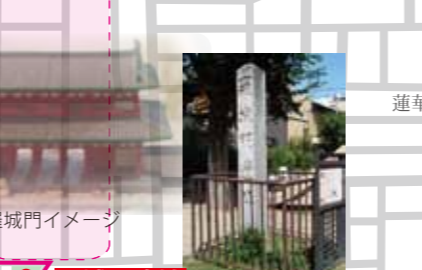
史跡 西寺跡
平安京建都時に羅城門を挟んで東西に建立された二大官寺の一つで、823年東寺は空海に、西寺は守敏に下賜されました。東寺が真言密教の道場として発展したのに対し、西寺は鎮護国家の官寺となり、その後の度重なる火災で完全に地上から姿を消してしまいました。現在は公園の中央に講堂跡が土壇として残り、付近に元位置をはずれた礎石が残っています。



西寺大炊殿跡
この辺りからは相当な規模の礎石が検出されており、西寺の大炊殿と推定されています。



鎌達稲荷神社
元稲荷とも伝えられ、土御門家(安倍清明の子孫)を祀っています。境内には浄蔵貴所を祀った塚があります。



羅城門遺址
平安京の中央を走る朱雀大路の南端に造られた幅35.7m、奥行約10.2mの二階建ての大門。暴風雨によって二度も倒壊し、980年を最後に再建されませんでした。羅城門上に位置していたとされる兜跋毘沙門天像(国宝)は、現在東寺に所蔵されています。



朱雀大路(推定)
北院門の軒瓦には、鎌倉時代(京都で最古)の瓦が残っています。



御影堂(大師堂)
弘法大師の住居であった大師堂(国宝)は、1379年の火災後に再建されました。堂内には「大師像」と、大師の念持仏「不動明王像」(いずれも国宝)が安置されています。

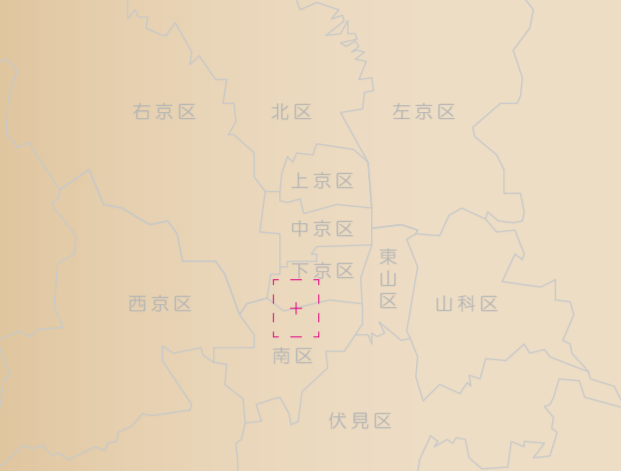


金堂(国宝)
宋の建築様式を取り入れた、桃山時代の代表的建築物。796年の東寺創建時に、最初に工事が始められました。1486年に焼失し、1603年豊田秀頼の発願により再建されたのが現在の建物です。



東寺(教王護国寺)
廃寺になった西寺とは対照的に、度々兵火に遭いながらもその都度再建されたのが東寺。境内の徳川家光によって再建された五重塔は、現存する木造塔としてはわが国最高(総高約55m)で、京都のシンボリックな存在です。境内は史跡指定され、1994年には世界文化遺産に登録されています。毎月21日の弘法大師の命日には「弘法さん」として親しまれる市が開かれ、数万人の参詣者で賑わいます。

11 東寺 西寺跡



～文化財と遺跡を歩く～ 京都歴史散策マップ



発行 京都市・(財)京都市埋蔵文化財研究所

東寺 西寺跡に関する発掘調査

東寺の五重塔は木造の建造物としては最も高いもので、京都のランドマークとしても有名です。東寺は建物は建て替わりましたが、平安時代からその位置を変えずに伽藍の配置もほぼ元のままです。これと同じ規模の寺が、平安京遷都後まもなく京を守るように羅城門を挟んで西側に建立されました。西寺です。京内にはこの二寺以外、寺を建てることは許されませんでした。しかし、西寺は平安時代の中頃から衰退し、鎌倉時代には完全に姿を消してしまいます。発掘調査は、遺跡と化した西寺跡の方が進んでおり、伽藍の復元ができるほどになっています。また、従来考えられていたよりも北側に建物跡がある等、伽藍の様子がわかってきました。



西市

平安京には、京の左右に市が設置されていました。東市と西市です。東市は現在の西本願寺の南部にあたり、西市は西大路七条の北東部にあたります。市が開かれるのは月の前半が東市、後半は西市と決まっておき、扱う商品も分けられていました。西市の発掘調査では、七条通で土壇状の遺構や井戸等が発見されています。また、遺物が良好な状態でみつきり、当時の銭貨が大量に出土しています。また、市の少し外側からは、祭祀で使われた墨書人面土器のほか人形等の木製品がみつっています。



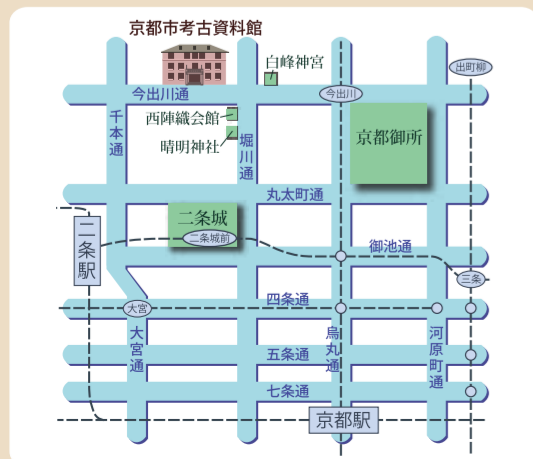
京都市考古資料館

大正3年に本野精吾の設計で建てられた旧西陣織物館を内部改修し、京都市内の発掘調査・研究の業績を発表・展示するため昭和54年11月に設立されました。特別展と常設展で構成され、約1000点の遺物が展示されています。遺物展示のほかにも、映像やパソコンで旧石器時代から近世にかけての京都の歴史を学ぶことができます。建物は、昭和59年に京都市有形文化財に登録されています。

〒602-8435
京都市上京区今出川通大宮東元入伊佐町 265-1
TEL. 075-432-3245 FAX. 075-431-3307
http://www.kyoto-arc.or.jp/museum/

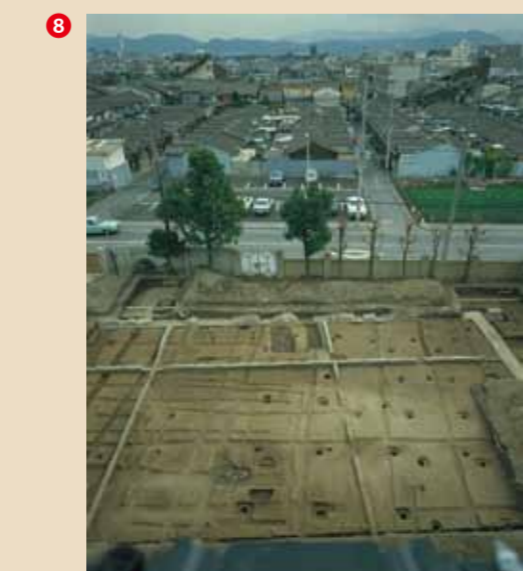
入館無料・月曜休館(月曜が祝日の場合は翌日)
開館時間 9:00~17:00(入館は16:30まで)

JR京都駅より地下鉄烏丸線 今出川駅下車徒歩15分
市バス201・203・59系統 今出川大宮下車すぐ



西寺跡

西寺は文徳天皇の国忌が行われるなど、官寺としての位置を保っていましたが、律令体制の衰退とともに荒廃し、正暦元(990)年2月の焼亡により大部分の伽藍が燃え落ち、その後ある程度の再建はされましたが、天福元(1233)年12月の火災で焼け落ちたとの記録を最後に、その後再建されることはなかったようです。西寺を偲ぶものは唐橋西寺公園内に土壇として残っている講堂跡と、土壇上の石碑および礎石だけです。ここを大正8年に西寺の金堂跡と認識して発掘調査が行われ、大正10年に土壇の周辺地が国の史跡「西寺跡」に指定されています。その後、昭和8年に土壇の南側が七条第二尋常小学校(現唐橋小学校)となりました。昭和34年から本格的な発掘調査が開始され、学校の校舎の建て替え等で南大門・中門・金堂・食堂・東僧坊・西僧坊・東回廊・西回廊・東小房子・西小房子等が発見され、それに伴って昭和41年に史跡範囲も追加されています。その後も精力的に調査が進み、西寺北部でも大規模な建物があることがわかってきました。また、寺の下層からは古墳時代の遺構や遺物がみつっています。



梅小路

平清盛の平安京内の邸宅である西八条第は、現在の梅小路公園の南半からJR敷地内にあたります。一部試掘調査が実施されましたが、発掘調査は行われておらず実態はよくわかりません。しかし、西八条第の北側で、平安時代中期の壬生大路東側溝を発見しています。同時に古墳時代中期の遺物もみつっています。



羅城門

平安京の正門玄関として九条大路に面して設けられました。羅城門は柱間寸法を5.1mとすると、東西35.7m、南北10.2m、高さ21mの建物と推定されています。平安京造営とともに建造されましたが、弘仁7(816)年に大風で倒壊、再建されましたが、天元3(980)年にまたも暴風で倒壊し、その後再建されませんでした。発掘調査は、何度か行われていますが、現在のところ痕跡を見出すことはできていません。後世に河川の影響でかなりの部分が破壊されたようです。



東寺

東寺は平安時代前期に嵯峨天皇から空海に下賜され、国家鎮護の寺と同時に真言宗の総本山として信仰を集め、様々な災害にあいながらも再建され伽藍を維持しています。伽藍が存在しているため、その周辺での発掘調査は行われていませんが、伽藍北部では一部発掘調査が行われました。その中で注目されるのは、講堂の中心にある大日如来の修復の折、その下の基壇を調査できたことです。基壇下からは杭が刺さった状況で発見され、講堂の中心位置に杭が打たれていることがわかりました。講堂造営時の測量基準の痕跡と考えられます。また、東築地の調査では、築地位置が平安時代から変わらずにあること、築地の造営が伽藍のものより少し遅れること等がわかってきました。

